

## 倭・大和から日本へ

陽光新聞社・顧問  
塩澤宏宣

先日来日したグルジアのマルグベラシビリ大統領は、安倍首相に国名をグルジアから「ジョージア」と呼ぶよう要請しました。

なんで？ と思い調べてみるとグルジアは旧ソ連に組み込まれていましたが、1991年に独立し、それ以来両国は犬猿の仲だそうです。グルジアはロシア読みだからジョージアと呼ぶことに決めました。グルジアはGeorgiaと書きますから、なるほどジョージアと呼べます。スペルはアメリカのジョージア州と同じです。

外務省の公式サイトでは、いまだグルジアとなっていますが、安倍首相は今国会で正式にジョージアとすることを約束したようです。そのジョージアは黒海に面し、北はロシア、西はトルコと接している小国です。特産品はワインで、世界最古の生産地といわれています。

旧ソ連の独裁者スターリンの出身地として有名です。そのほか旧ソ連時代のシュワルナゼ外相が独立後の初代大統領になったことを記憶しています。

前置きが長くなりましたが、私が上記の記事を読んだとき、ふいっと頭に浮かんだのが、本題の「倭・大和から日本へ」というテーマです。本棚から「日本の誕生」(吉田孝著：岩波新書)を取り出して拾い読みしてみました。

### ✿万葉集の山上憶良の歌について

「去来子等 早日本辺大伴乃 御津乃浜松 待恋 奴良武」(いざ子ども 早く日本へ 大伴の御津 の浜松 待ち恋ひぬらむ)。

ここではなぜか日本を「ヤマト」と読む。「大和」でいいのではないかと筆者は問う。倭国名は古くから「やまと」であり、邪馬台国の邪馬台までさかのぼる。つまり倭も日本も和訓は「やまと」であり、地域名は757年ごろから大和と書くようになっていた。

701年は大宝元年、大宝令が制度化して年号制度ができた最初の年。以来、今日の平成まで年号は続いている。その翌年、つまり702年(大宝二)、粟田真人を主席とする遣唐使船が中国の楚州塩城県(長江河口の北)に漂着した。通報を受けた県の役人が取り調べに当たり「どこから来た？」の問いに、「日本から来た」と答えた。役人にとっては「日本」は初耳だ。やがて取調べが進み、「日本」はこれまでの倭国に近い東方の島らしい、となった。いままでの倭が日本に代わったとは思わない。なぜなら中国では国名ではなく、「魏」とか「漢」といった王朝名であり、革命で王朝が代われればクニの名も変わるのが習慣だ。あるいは役人は、倭国が日本国に滅ぼされたと考えたかもしれない。

ともあれ、遣唐使・粟田真人は、「日本」という国号を中国皇帝に認めさせることに成功した。時の中国皇帝は、中国史上唯一の女帝・則天武后。武后は遣唐使を長安の大明殿の宴に招待した。旧唐書・日本伝は、そのときのことを特筆して「真人好んで経史(経書や史書)を読み、文をつづるを解し、容姿温雅なり」と賞賛している。真人は、かつて道観と名乗った僧侶であった。留学僧として唐で学び、帰国後に還俗して大宝令の編纂に参画していたので語学にも堪能であったと推察される。「日本」を承認させた立役者は真人のお手柄といえよう。ではなぜ「日本」なのか。

「日出づる処の天子、書を日没する処の天子に致す、恙無きや」

聖徳太子が遣隋使に託して隋の煬帝に渡した有名な国書である。煬帝はこれを無礼として怒っ

たといわれるが、倭国王が「天子」と称した点を怒ったのであり、「日出処・日没処」の優劣には関係ない。古代より日本人は日が昇る情景を崇拜してきたことは「記紀(古事記・日本書紀)」からも強く理解できる。伊勢神宮も日が昇る方角、つまり東を尊ぶ。

仏典には「日出づる処は是東方、日没する処は是西方、日行く処は南方、日行かざる処は北方」とあり、優劣の意はない。当時の倭は国号を定めるとき、中国との関係、すなわち「西」の中国に対する「東」の日本、を基軸にしたのである。唐の皇帝から冊封(朝貢して属国になることを願い、その身分を保証してもらう)を受けないで、あくまで独立国「日本」を貫いた朝廷も、中国との関係を基軸にして世界を見つめていたのである。

中国の史書では、「隋書」までは倭国と記載されているが、それ以降「宋史」からは日本となっている。

## ✿マルコポーロの「ジパング」について

ジパングは日本(ジツポン)になる。「日」は呉音ではニチ、漢音ではジツ。「本」は呉音・漢音ともホンという。慣用でジツポンと発音されていたところからジパングとなったようだ。イエズス会の辞典にはニホン・ニッポン・ジツポンの三つの呼称が併記されている。

あくまでも私見ですが…、大化の改新の時期は、国の形が整ってきた時期といえると思います。大宝令は天皇制とともに、中央集権国家としての体裁が整い、それは明治期まで続くことになったのではないのでしょうか。日本人が「国」という概念を意識したのは「元寇の乱」である、という説があります。

司馬遼太郎さんとドナルド・キーンさんの対話集で読みました。言うまでもなく、初めて外国が攻めてくるという事態になって「国と国」という意識が芽生えたといえましょう。

国の統治について日本では、天皇は主に神祠をつかさどり、政治・軍事などは幕府が執り行うという、一種の分業体制も日本独特の誇るべき制度ではないでしょうか。英国もそうですね。多くの外国の大統領制では、法と国民がよほどしっかりしていなければ、独裁を招きます。

中近東では大統領がアラブの春で失脚しましたが、アフリカや中央アジアには未だに大統領という独裁者がたくさんいます。また、大統領と首相、あるいは党主席と行政府の首相が政治を分担する国もありますが、よほど両者が善人で相互理解がなければ内紛を招きかねません。

最後にひと言、申し添えますが…。「東アジア世界と日本」(歴史教育者協議会・編)によりますと、網野善彦氏は「日本の国号のことを歴史教育で扱っていない」と問題提起しています。また東野治之氏も「一般にはジャパンという称の由来が“日本”にあることさえ、十分に認識されていない」と指摘しています。

これで思い出すのが「シナ(支那)」のことです。現在は使用禁止(自主的か?)になっていますが…。元々インドで中国を「秦」と言っていました。「秦」をChin(チン)またはChine(チーネ)と呼んでいたところ、中国人の僧侶が「支那(支=ささえる、那=国)」として唐へ持ち帰りました。その後のシルクロードによる東西文化交流によってヨーロッパにまで広まり、現在でも一般的に中国はChina(チャイナ)として使われています。漢字の意味するところからはすばらしいと感じますが…。

現在日本では、一部の限られた人たちが使っているだけですが、その歴史を知れば「日本→Japan」と「秦=支那→China」は同じことではないのでしょうか？しかし、日清戦争以来、日本が中国に対して行った行為と連動したことにより魯迅など中国知識人の要望と、日本の行為を反省する立場から、中華人民共和国を「中国」して使用することにはやぶさかではありません。